

文化高知

'94年3月 NO.58



「WOUND」 SEIGO (西悟)

(財)高知市文化振興事業団

緑の実践教育

渡邊 恒

社会の成熟化と並行して、国民の価値観が「心の豊かさ」へと移行してきているなかで、自然や環境、そしてその源泉としての森林に対する意識が急激に高まりをみせている。

森林林業にかかわる立場から、自然や環境と森林との結びつきをもつと理解してほしいと念じ続けてきた者としては、これに勝る喜びはないわけであるが、反面、その声の高まりの急激さに戸惑いを覚えるとともに「森林があることをもってよし」とし、「林業は自然や環境の破壊者」といった表面的、観念的な理解が意外に多いのではないかと感嘆を拭い切れないでいることも事実である。

こうした傾向は何に起因して起るのであろうか。一つには森との接し方の国民性にあるのではないかと。「プロローニユの森」や「ウィーン

の森」では、日がな一日森林の中を散策する人の影が絶えないとの話をよく聞くが、ヨーロッパでは、森の懐深く分け入って、体内にその息づかいを取り込み、神（ネイチュア）の摂理に触れることがすんなりと暮らしてに溶け込み、生活の一部になっている。そうした日常の自然への入り込みを通じて、肌で森林の仕組みを知り、森林との上手なつき合い方を習得している。

片や日本では、森林は神々のおわしますところ、そこに踏み入るなどということは畏れ多いことと考える宗教観にも影響を受け、「森は外から眺めるもの」として、銭湯の壁絵から名所旧跡の「借景」に至るまで、森林をただ景色とみることが根づいてしまっているように思える。

拠って立つ宗教、文化等の影響に加え、教育にも原因がありそうである。能力、実力重視の社会に序々には変わってきているとは言われるものの、学歴社会の基本構造はなおし

つかりとはびこっている。学歴社会の中で、学校も家庭も受験のための机上の知識の詰め込みを身をやつし、最も感受性に富んだ少年期に自然に触れる機会が奪われることにより「肌で自然を知ることをしていない子どもたち」を生み出してきたと言えなくもない。

ところで、わが国の自然を代表する森林は、一部で言われるほどには脆弱でない。植物として人間同様、社会を形成し、種間、種内でせめぎ合いを行い、片方において人間を含めた外敵に対抗して種の維持保存を図る自己防衛の術を心得ている。そうした森林の中にわが身を置き、森林の息づかいに触れ、木々の営みのし

たたかさを肌で感じる。また時には樹を伐り倒したり、土をほじくり返したりもするといった原始的な体験を通して、自然の仕組みが自然と身に付くものであろう。

昨年、公立学校に導入をみた週五日制の土曜休日を利用して、森林教室を開催した学校が少なからず見受けられた。今後こうした森林の中の自然教育がさらに活発に行われることを期待するが、さりとて大切な子どもたちをあずかる教育では、万

一を思えば闇雲に山に踏み込んでいでは済まされぬ。かと言って安全第一でただ遠くから眺めてくるだ

た。最後の特徴は、オペラ『夕鶴』の演出で、『オペラはこうして演出される』という本も書かれている小田健也先生一行が日本から来て下さったことでした。そのおかげで交流の

ばは演劇関係者にまで広がりました。その中心的役割を果たして下さったのは野津治仁さんでした。

彼は天理大学からネパールのトレブヴァン大学に留学している学生ですが、木下順二の『夕鶴』を翻案劇にして演出、自演したり、ネパールの民話を翻訳して出版したり、ネパールの詩に作曲してテープを出したりでネパールになくてはならぬ文化人でした。

私も須工時代に、高知大学演劇部の『蛙昇天』を観劇して以来の演劇ファンです。大阪映画演劇学校の第一期卒業生になったのは今から三十二年もの昔でした。

さて余談が長くなりましたが、私と小田先生との出会いは平成三年で、

けでは、皮層的な理解を助長するだけの結果にもなりかねない。山に入り込んで、安全に自然の樹や生物や土に直に触れることができ、また時には樹を植えたり下草を除去したりといった森林の営みの手助けをしてやれる、そんな「フィールド」が求められていると言えよう。

国有林では古くから部分林制度を利用して学校の設定を呼びかけ、また森林教室の実施に際しては営林局・署の職員がインストラクターとなって活動を支援してきている。

高知県はさすが森林県、学校林設定率は他県を圧して高率ではあるが、それでも学校の二割に満たない。

緑のスクーリングを通じ、青少年に借り物でない自然の理解、さらには正しい森林・林業観を植えつけるため、より多くの学校に学校林の設定を働きかけるとともに、緑のインストラクター機能の一層のブラッシュアップを図ってゆきたい。



(高知営林局長)

ネパール個展をとおして

野並 允温



「こんな面白い画家と出会ったのは初めてだ」と、ロイヤル・ネパール・アカデミーのウッタム氏。しきりに画家「らしくない」を強調して首をかき上げていました。

九三年十二月三十日から九四年正月三日までの五日間、私はネパールのカトマンズ市でサルジャナ・アトギヤラリーを借りて、この街で二度目の個展を開催したのです。古里高知では「の・かな子」と呼ばれながら育った私は、その個展のオープニングパーティーや打ち上げパーティーなどで大勢のネパール人を相手にジャパニーズ・サイドの歌や踊りを披露して楽しんだからでした。

私は、昭和三十年に須崎工業高校を卒業してベガスミスシンKKに就職して以来四十年間、いや現在もサラリーマン生活を続けています。だから「画家らしくない」と見られたのでしよう。

「人生は一度きり」の思いから、たえず余暇の活用に工夫と努力を集

中させてきました。その内の一つがプロの画家として、フランスのサロンでも評価を頂くことになりました。でもサラリーマンですから、有給休暇の範囲を越えないように気を配りながら、十三回の外遊と二十回の個展をこなしています。

さてカトマンズ個展の一つの特徴は、日本大使館のご後援を頂いたことでした。特命全権大使の伊藤忠一氏が「日本とネパールの文化交流に重要な架け橋」となるようにと、メッセージを下さいました。

第二はネパール政界の重鎮で、民主化運動の際、日本の憲法を研究されてネパールの憲法草案にいくつか採用された、親国家のダマン・ナト・ツンガナ国会議長によつて開会されたことでした。議長は「継続した活動」を高く評価して下さいました。また議長の奥様は「野並さんが四十才から始めたと言われ、私もファイトが湧いてきました」と述べられて絵画活動を始めようと言われまし

た。

最後の特徴は、オペラ『夕鶴』の演出で、『オペラはこうして演出される』という本も書かれている小田健也先生一行が日本から来て下さったことでした。そのおかげで交流の

ばは演劇関係者にまで広がりました。その中心的役割を果たして下さったのは野津治仁さんでした。

彼は天理大学からネパールのトレブヴァン大学に留学している学生ですが、木下順二の『夕鶴』を翻案劇にして演出、自演したり、ネパールの民話を翻訳して出版したり、ネパールの詩に作曲してテープを出したりでネパールになくてはならぬ文化人でした。

私も須工時代に、高知大学演劇部の『蛙昇天』を観劇して以来の演劇ファンです。大阪映画演劇学校の第一期卒業生になったのは今から三十二年もの昔でした。

さて余談が長くなりましたが、私と小田先生との出会いは平成三年で、

その年の国際フェスティバルで團伊玖磨の指揮でオペラ『チャンチキ』が上演された時の演出家小田先生でした。師は私を気に入って下さって、銀座での個展や東京近代美術クラブの個展をご高覧頂きました。私も師の演出されたオペラの鑑賞で、岡山や四日市に出かけたりと交流が深まっていたから。

「日本人は働き過ぎ」と白い目で見られています。今日の不況は一時的な経済現象ではないのかも知れません。週休二日制が定着し、年間労働時間は着実に短くなってきています。失業保険が雇用保険と呼名が変わり、完全失業という社会不安を一時帰休という限定失業の道をとるようになりました。おかげ様で、私はわずかに三日の有給休暇でカトマンズ個展を開けたのですが、趣味のない友人達は毎月二回もある三連休や四連休で「粗大ごみや濡れ落葉や言われて、かたなしや。のおやん（私のこと）は趣味があつて」とうらやましがられています。

人生は一度きりです。大阪では人の値打ちまで「なんぼのものや」と言いますが、生涯とおして自分自身に「なんぼのものや」と問いかけて生きたいと思っています。いごつそうな土佐の血なんだから。(洋画家)

地方文化と博物館

松岡 司

文化とは何だろう。辞書をひもとくと、「文徳で民を教化すること」「世の中がひらけて生活が便利になること」「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住をはじめ技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容を含む」などである。現代的解釈を優先するには『大辞林』が便利だが、古典的語義を探るにはやはり『広辞苑』が良い。文化は倭の造語にあらず、まさに正真正銘の漢字熟語であったのだ。今の私たちが持つソフトイメージとはおよそ縁遠い、治国の根幹にかかわるものとして上がしるしめす政策であったのだ。かくて前漢の学者劉向は言う、「聖人の天下を治むるや、文徳を先にして武力を後にす。凡そ武の興るは服せざるが為なり。文化改めずして然る後に誅を加ふ。夫れ下愚は移らず、純徳の化する能はざる所にして、而る後に武力加はるなり」。彼の名著『説苑』において武の途を説いた、巻十五「指武」の一節である。春秋を最も得意とした経書の専門家にふさわしく、ここにもまた威徳と力をもつて国を治めようとする儒教観がうかがわれている。文化とはこういう意味であったのだ。

資料を持ち去ったのは、一年数ヵ月前のこと。夜陰に乗じてか白昼堂々だったかは知らぬが、目下私の働いている佐川町立青山文庫の前を素通りして行ってしまった。互いが互いの立場と価値を認め合う。それが文化というものの基本ラインと、思い、そのモラルを当たり前のようについていた私にとっては、実に意外な展開だった。西洋文明に傾斜した福沢が、全開の西洋に対し日本を半開の国家としたように、もしかしたら文化と文明を取り違え、文明都市圏の歴史が半開の自治国佐川の文化遺産を、自分達の文化論理である文徳でより有効に文化的活用してつかわす、といった発想だったので？

平成三年の暮れ、家蔵の資料をどう処分するかまだ決めかねていた当主に対し、私は現下の青山文庫が試みようとしている方針を説き、理解を示した当主によって一時はそのすべてが文庫に譲渡される方向にあった。事前の概要調査によって膨大な量と質の高さが明らかになったとき、佐川町は町・町教委ともにこれを正面から受け止め、行政として様々な前向きな対応をすることさえ決めていた。歴史民俗資料館はこうした文庫の方針と熱意を知りながら、事前最高責任者が所蔵者宅へ出向いた

傾けて地元自治体を説得しなければならぬのではないか。国の施策として強制出品権のある館ならともかく（国立博物館とか大阪市立美術館など）、それが博物館界のモラルというものではないのか。中土佐町に行けば中土佐町立美術館がある。中土佐の風土とはかわりの少ない異和感はあるにしても、県立美術館が仮にその町内から美術品を入手しようとすれば、おそらくちよつとひと声くらいは掛けよう。これこそ近代書道発祥の地として関連のある安芸市の書道美術館は、県内のみならず本邦書道界の重鎮の作が揃っている。その安芸市で県や他市町村の資料館や博物館が、地元と書道美術館を全く無視して資料あさりをする事が許されるだろうか。室戸市には博物館のようなものはまだない。しかしだからといって、図書館や多田家に残るような捕鯨資料を、仮に所有者が良しと言ったからといって簡単に受け取れるものではあるまい。所有者の承諾さえとれば、合法で一丁上がりとするのはいかなるものであろうか。

「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果」云々の文化は、まさに文明の同義語であって、平均所得の低い高知県が懸命に文明の発達を計っているように、各市町村も文化の向上に文明の発達をオーパーラップさせて必死の努力をしている。生活が向上し物が有り余った現在、人々は精神の一層の充実を求めて教室・講座物に押しかけるといふ。これは精神というより心のと



の生態研究という鯨文化を伴って町の振興に役立っている。博物館や資料館におけるグレードの高さは、私には、いかに異質あるいは他地域の文化を理解するかにあると思う。高知市の自由民権記念館が、ある地においてその地と無関係の民権資料を収集したとしても、一般的には不都合はないし、むしろ研究者はそう望む。しかしその地の文化と深くからまるとすれば別問題である。所蔵者に優秀な設備や機能を見せつけて、劣った郡部よりも良しと勧めるのは、文化の本質を解しているとは言いがたい。これではアイヌの人々を文明の未開として、その文化を解しなかったのと何ら変わらない。福沢が、地球上において物質文明の最も遅れた地域を未開の国々としたのと少しも変わらない。県が最も基本としなければならぬ文化の理念とは、県立の文化施設の充実（良いものができることはわかり切っている）などではなく、市町村自治体の自治の文化を大切に、その地方の文化の基盤を強化することこそ、県全体の文化レベルの向上につながるという認識ではあるまいか。

山本 大著 幕末の青春 坂本龍馬の生涯 定価 二、〇〇〇円	依光 裕編著 珍聞土佐物語 上下巻 定価 一、六〇〇円	鈴木文彦・井本正人・関根猪一郎著 協同組合と地域づくり 定価 一、〇〇〇円	外崎光広著 土佐自由民権運動史 定価 二、八〇〇円	外崎光広編 土佐自由民権資料集 定価 三、〇九〇円	土居重俊・派田教義編 土佐弁 土佐日記 定価 一、〇〇〇円	岡林清水著 高知県文学散歩 定価 一、八〇〇円	高知の文化を考える会編 高知の文化を考える 定価 一、二〇〇円	高知市文化振興事業団編 わがまち百景 定価 一、二〇〇円	簡井広道著 両帳の歳月 定価 二、〇〇〇円	土居重俊・派田教義編 高知県方言辞典 定価 六、一八〇円	高木啓夫著 土佐の芸能 定価 四、九四四円	清水孝之著 中山高陽 定価 三、九一四円	清遠幸男著 高知レポート⑤ 高知県の工業 定価 一、〇〇〇円	今井嘉彦著 高知レポート⑥ 河川はよみがえるか 定価 一、〇三〇円
-------------------------------------	-----------------------------------	---	---------------------------------	---------------------------------	-------------------------------------	-------------------------------	---------------------------------------	------------------------------------	-----------------------------	------------------------------------	-----------------------------	----------------------------	--------------------------------------	---

健康マラソン

和田 憲夫



平成六年二月八日(火)晴、午前五時、目ざましの最初のピツという音と同時にサッと起きる。ジョギングウェアに着替えて洗面、「蜂蜜」を大さじいっぱい、水をコップいっぱい、ストレッチ約十分、五時二十分スタート、今朝はかなり気温が低い。手袋をしていても指先がちよつと痛い。初めの一キロは約六分ぐらいのゆつくりペース、体がだんだん温もってくるにつれてペースも次第に上り、終りの一キロは四分三十一秒。あとまたスピードを落として近くの小学校へ入って終わる。走行六キロ、この時分には結構汗をかいているのでそのままラジオ体操、ストレッチ、冬以外の季節はここで全ての整理運動をやるが、冬場は風邪をひくといけないので汗が引つ込む頃にはやめて鉄棒で懸垂五回、ぶら下り約三十秒、家へ帰ってシャワーで頭から全部洗う。「朝シャン」なる言葉がはやっていようだが、私は十七年来やっている。そのあと着替えてやり残したストレッチの続きをやる。朝食は午前六時三十五分頃、七時十五分自宅を出て高知へ、判で押したような毎朝である。

これが起床から出勤までの一部始終だが、四季を問わず午前五時起床で走り出してからもこれ十七年になる。

実は、私は青年時代は長距離走をやっていた各地の競技会や駅伝にも出ていたが、昭和十九年に県下市町村対抗駅伝で区間記録を出したのを花道に現役引退、走ることをスッパリ止めた。その上、田舎政治家のはしくれをやったので酒を飲む機会も多く、運動不足と相まっていつの間にかやらブクブク太り出し、一時は七十キロにまでなり、身長一五八センチだから完全な肥満体、こうなると体力の落ちたところへ風邪は定期便のようにひくは、ギックリ腰はやるはお世辞にも健康体とはいえない体になってしまっていた。あるきっかけで(これを詳しく書くには紙面が足りない)走り出し、それからギックリ腰や風邪ともさようなら、体重も五十四キロ、五十五キロと安定して自分では年齢の割には健康だと思っている。

走りをはじめは健康のためだったが近頃は趣味になってきて、県内外のマラソン大会に参加、かの有名な「青梅マラソン三十キロ」も六十一歳の時完走した。

また、仕事から出張が多いが、その際も必ず用具一式を持参して走る。東京出張が多いので皇居周回コースはもう百回以上走っている。外国でも走る。かのワシントン・ポトマック河畔も気持ちよく走った。私は大正十三年一月生まれの満七十歳、齢の割りに若く見られる。昨年は古稀も祝ってもらった。医療費もタダになった。

だが、走ることで得たこの健康と若さ?をこ

れからも出来るだけ長く維持するよう走り続けたいと思っている。現在二七、一二九キロ走行中。

元気に働くことこそ

村山 鈴子



「健康は人間が自分に贈る最大の贈り物である」……私の好きな言葉です。

還暦を過ぎて四年、特に支障なく仕事ができる。頭の方は二の次としてまだまだ大丈夫だと自負している。

健康法と改まって考えたことはないが、ただ信条みたいなものはある。実母は難聴であったが米寿の頃はしゃきしゃきだったし、一番母親似といわれているので、九十までは生きるだろう。まだ三十年も生きるなら、今から遊びよつたら大事。それに嫁して四十年余になるというのに、まだまだ毎日御飯をつくってくれる母がいる。「舟に船頭は二人もいらぬ」と勝手にこじつけている。

生い立ちは、両親が結婚して十年も子どもに恵まれず、姪を養女にと話が進んでいた折、母が三十三歳のとき長兄が生まれ、十年後には五

人目の末娘として私が生まれた。

幼児の頃は体も小さく、髪の毛も少なく、顔色や器量まで悪かった。

父が「富美ちゃんと鈴子を遊ばすのはむごい」と嘆いていたそうだが、今も全然改善されてはいない。

小学一年生の時、日中戦争が勃発。五年生の時には太平洋戦争となり、大好きなお菓子がだんだん店頭から消えた。そして、食料や衣類など何もかにもなくなつて「欲しがりません、勝つまでは」の辛い悲しい時代に育った。

今は菓子でも何でも溢れているので、よほど気をつけないと過食する。

お陰でものは大切にすると、年齢の割には歯も丈夫で好き嫌いの全くない体になり、その点はあるがたく思っている。

借家住まいの私は、車もなければ運転免許も持っていない。理由は簡単、交通の便が良すぎなのだ。バス停までは歩いて一分、タクシーを拾うのは何十秒、JRの駅は踏切でチンチン鳴りだして走つても間に合う。

でもいくら恵まれていても、職場まで運んでくれるのは、主にわが愛車、自転車である。雨の日たまたまタクシーに乗ると渋滞、渋滞でイライラする。何分、何十円も違わないのにメーターばかり見つめて、朝から胃ばかりか心臓まで悪くなりそう。

あまり手元に置かず算筒にしまい込む服を買う時は、千円も二千円も気にならないのに、われながら情けない。もちろん帰りはテクテクと時間をかけて歩く。

長年の夢、わが家「ついでの居」ができるの

は、運良く宝クジが当たるか仕事を辞める時か見通しは立たないが、それを唯一目標とし大恩ある母上に「おばあちゃん、今日のおかずはちつくと辛かったきに、竹原先生に血圧を測ってもらいよ」と言い残し、元気に出勤する毎日です。

いつまでも元気に働くことこそ一番。

(伊藤外科)

心はいつも健康に

葛目 朋子



ほんのつい最近まで気楽な学生生活を送っていたはずなのに、ふと気付けば昨年からは社会人一年生となつており、学生生活とは一八〇度違う生活を送っています。

それまで周りの人達がよく、就職すると体力が落ちて体調を崩しやすいつつを聞いていました。が、よもや自分もそうなるとは思っていませんでした。

その理由をいくつかあげてみますと、すぐ思いつくことでも二、三あります。

まずそれまで自転車のみが交通の手段だったのが、免許を取ってからは車、バイクを使う機会も増え、足から退化し始めたこと。

二つ目は冷暖房がない世界から、夏冬一変して効き過ぎる冷暖房のある世界に変わったこと。そして最も大きな原因であると思われるものが、不規則な勤務時間だと思えます。これはかなり重要だったらしく、健康には自信があった私も、少々危険信号が出てきました。

そこで、「これではいけない」と思った私が最近行っている健康維持の方法を紹介します。まず一つ、通勤等にはできるだけ歩くか、自転車をを使う。

二つ、エレベーター、エスカレーターを使わず、階段を上がる。

三つ、腕立伏せプラス腹筋運動。長続きのコツは、変に気負わずに何かをやるついで(寝る時など)にやること。ちなみに私は、お風呂に入る前にそれぞれ三〇回ずつを実行しています。四つ、何かスポーツをすること。これも体や時間に無理のない程度に。私の場合は、週一回の割合で空手を習っています。これは大声で気合いを入れたり、体を結構動かすので、精神面でも肉体面でもGoodです。ただし、独身女性には程々にしてないと・・・です。

そして、最後は快食快眠を心がけること。よく「疲れたな」と思う時は、大抵い言ったどちらかが欠けていることが多いものです。

さて、思いつくままに書き記した私の健康法ですが、皆様のお役に立てたでしょうか? でもやはり大切なことは、心(精神)がいつでも明るく健康なことではないかと思えます。

「病は気から」とも……

皆様健康でありますように。

(高知南警察署)

土佐神社社殿

溝渕 博彦

土佐神社は高知市の東北にある一宮に鎮座する土佐一の宮の古社である。北山山麓の中でも特に杉の高木が群生しているが、それが神社の位置である。楼門から社殿までは杉並木が続き、県内でも外にあまり見られない雰囲気を残した神域となっている。

祭神は一言主神、味鉦高彦根神であり、その創立は明らかではないが、古記によると雄略天皇四年(四六〇)に鎮座し、土佐国の総鎮守として皇室や武門の信仰があつたこととされる。天武天皇四年三月には神刀一振献上の項が見られ、貞観元年には神階が従五位に叙せられ、延喜の制では土佐唯一の大社に列し、天慶三年には正一位の極階にまで進んでいる。延喜式には都佐坐神社とあり、土佐国風土記逸文には土佐高

賀茂神社と記されているが、土佐の国造に任ぜられた賀茂氏が高鴨神すなわち味鉦高彦根神を祭つたのではないかとされている。

現在の社殿は永禄六年(一五六三)五月、本山梅溪が長曾我部元親の本拠地であつた岡豊城を襲撃した時に、一宮集落を焼き打ちし、その余燼によつて焼失したものを元親が永禄十年(一五六七)十一月十五日再建に着手し、元亀元年九月十三日棟上げ、同二年(一五七一)春竣工したものである。社殿は本殿、幣殿、拜殿、左右翼、拝の出からなり、本殿と幣殿は別の建物であるが、正面から見ると連続した建物であるかのように見える。

江戸期に入り、二代藩主である山内忠義は寛永八年(一六三一)に楼門の再建をし、慶安二年(一六四九)

には鼓樓の建立がなされている。楼門を除く外の建造物は国の重要文化財に指定され、楼門は県の有形文化財となっている。

本殿は桁行、梁間共に五間で、屋根は入母屋造り柿葺である。正面に三間の向拝を付けた大きな規模のものだが、柱から虹梁、桁、隅木、檼に至るまで材料はすべて細身で華奢であり、強く反り返った軒とともに見る者に軽快さを感じさせる。また木鼻や葦股内の彫刻には極彩色を施しており、絢爛優美な建物である。近年の修復工事の結果、当初の形に彩色が復元されており、神社側面からの景観を楽しみたい。

拜殿は一間四方の広さを取り、そこを中心の本殿寄りに幣殿、前方に拝の出、左右に翼廊と称する板間を出した十字形の平面になっている。

られる。やはりこの場合は建築の構造と機能が先にあったと推量される。土佐の台風常襲地としての強風は当時としても大変なものであつたろう。長方形平面では一方からの強風や地震に弱く、それに対向するためには直角方向に長目の軸組みを必要とした。そのため平面は十字型となり、幣殿と拝の出の機能性を考えた場合に、その部分の長さが決定された。このような十字形平面の拝の出は段々に短くなって向拝となり、退化して軒唐破風にまでなっていく。

鼓樓は社殿前庭の東側にある二階建ての建物である。縁下から腰袴といつて縦に板を張った珍しいもので屋根は入母屋造柿葺である。階上に太鼓を吊つて時を知らせる機能を持ち、神社ではこの名称で呼ばれる。柱上の三手先はにぎやかで、彫刻は自由さがあり、木鼻彫形も精巧なものである。地樋、飛檐檼など屋根の軒先構成も大変美しく、近年の修復で一段と当初の豪華絢爛さが堪能できる。楼門は桁行三間、梁間二間で入母屋造り銅板葺だが、かつては柿葺であつた。中央間一間が通路で両脇に神社を守護する随神が置かれている。軒の反り、穏やかな屋根勾配と深い軒の出など全体的に大陸風様式の和様で構成されている。

(高知県文化財保護審議会委員)

土佐神社社殿



高知レポート

5. 高知県の工業



清遠幸男著
高知県の工業と技術に関し、その歴史と各業種の主要企業の概要を紹介することで、高知の第2次産業の全体像を示す。
A 5・112頁 定価1,000円(税込)

6. 協同組合と地域づくり



鈴木文彦・井本正人・関根猪一郎著
高知市の農協・信用金庫・生協など、協同組合の現状と課題を地域づくりの視点から分析。
A 5・136頁 定価1,000円(税込)

流路訪作(二)

少量多品目の里

山岡 浩

城下の街筋から、遙か仁淀水系を爪立ちて追う。厳冬の季、西峰群雪のなかに一際、小富士の端正な鳥形山の容姿が浮かぶ。全山純質の石灰石鉱山にして、露天掘りの頂上を徐々に削りつつ通年雪景をなす。

背に旭遙かな嶺の装いは
採石すすむ雪の鳥形
鳥形山西北の流下溪流が、岩屋にて本流に注ぐ。仁淀川はここを本県最上流地点として県境を越す。

四国の最高峰石鎚山を源に、仁淀川は全長一二五キロにして、県内七五キロの流路。殊に県境からの東進流路は、巨岩そそり立つ溪流にして仁淀・池川・吾川・吾北の上流域をなす。

やがて河岸開け越知・佐川・日高・伊野が中流域となり、河口に臨む下流域が春野・土佐市となる。

およそこの流域農業の特質は、上・中・下流域別変化の特異性、その編み育つ優れた作型群にあった。

上流域農業は、きつい傾斜の立地ながら豊富な森林資源を擁し、丹念に棚田・段畑を拓き、米・麦・甘藷・楮三極と製紙・茶・コンニャク・トウモロコシ・桑と養蚕・土佐牛など、農蓄林の輪栽複合生産体系を確立してきた。

中流域農業は河岸段丘と盆地、支流域の低湿地など、それに山麓の畑

地によって米・麦・甘藷・生姜・里芋・製紙・桑と養蚕・土佐牛など農作の多角的生産方式をつくる。

下流域農業は、河口に臨む東西沃野の米・麦と野菜多毛作、それに山麓果樹園地が拓けた。

こうした適地適作の、合理的農法の構築が流域の豊穡を産むも、やがて農業変革の嵐が流域に荒ぶ。

迎えた経済成長長期、その産業進歩と国際化が、穀類・澱粉・燃料・繊維・食肉など、食糧と原料作農業を直撃。それは流域を遡る程に地域農業存立の基盤に迫り、主要品目の経済性低下が、さらに過疎化に拍車をかけ、止めどない地域農業社会変貌への道を余儀なくされてきた。

馴染み深い伝統品目の、市場性衰化の道程に呻吟しながらも、嵐跡に耕す人々の流域農蘇生の願望が、地域おこしのエネルギーに凝結する。

流域農業の視座を、伝統品目の選択的継承におくとともに、新しい品目選抜を基幹とする新農法の創造を命題としてきた。

下流域に発達した施設園芸は、冬場型加温施設栽培として、胡瓜一作・ピーマン一作・胡瓜+茄子・西瓜三作・メロン三作など、多種多様な作型の闊達な編成を遂げながら、園芸共販産地の躍進がある。

中流域の園芸は、生姜・里芋など

の土ものに加え、冬場型無加温施設栽培を旨とするトマト・胡瓜・苺・苺の栽培が部分加温に前進する。

上流域は、茶の伝統品目があつて、これに夏場型雨除施設栽培のシストウ・苺・トマト・苺など、念願の園芸農法が根付く。仁淀若鮎の如く園芸品目溯上顕著に、上流域型園芸共販産地の形成が進展する。

流域農産品の流通は、主に農協系統共販で全国市場に向かう。域内に今成・枝川・弘岡など露地もの高知卸売市場への出荷がある。

だがそれにも増して、市場無縁の営農環境・地域環境が重く存在する。そこに第三の流通、産地直販の台頭があり、さきがけて産直を築き上げてきた里として「佐川町農協婦人はちきんの店」がある。

昭和三十四年、農協の軒を借り、自給品を持ち寄る土曜市として始まる。

六十一年に、「農協婦人良心市組合はちきんの店」をおこし、少量多品目、真心と健康の店」を信条としてきた。

良心市組合員は三百七十五人、地元佐川店を拠点に、高知市の城見・高知駅前・瀬戸・六泉寺の四店、店員二十一人、専用車二台の構成。

開店は月々土。入荷は七時三十分～九時、営業は本店八時～十六時、

高知店十時～十六時。出荷者は登録バーコード付荷札に自宅値入れで持ち込む。

荷は無人受け入れて、本店は種別販売コーナー、高知四店向けは色柄別コンテナに各自配る。

出荷者の出足は早い。夜の明けを待ちきれず、自転車・バイク・軽四車など様々に運ばれてくる。

開店間際から、詰め掛けるお客さんで賑わい、清々しい故郷の温もりが立ち込め熱気を醸す。

売場は、冬枯れの季節ながら台所を満たす品揃えがあつて、その冴えたレイアウトを一瞥する。

店先には、菊・百合・鉢花など花卉類が香り、サカキ・シキミが添う。

コンテナに大根・ホーレン草・トマトなど根菜・葉菜・果菜類が勢揃いし、瑞々しく豊かな鮮彩を放つ。

甘藷・生姜の土もの、温州・晩柑類・矮化林檎の果実、鶏卵・蜂蜜・牛乳の畜産物等々産地の顔が揃う。加工品の棚も圧巻、伝統の味と洗練された主婦自慢の作品が溢れる。



産直専用車の準備

漬物類・味噌・豆腐に惣菜類、寿司・弁当類・餅饅頭類に名物桜餅も。奥の棚は茶処だけに干茶、そこに竹箒・炭・椎茸の林産が加わる。

数多産品のその一つ、柑橘園を訪ね登る。南下する横倉山系に柳瀬川が取り付く山腹、大河に暖風を迎え寒気流の停留を避ける立地。

温州の北限域ながらも、拠って立つ適地にして技法よく秀果を産む。

五〇～六〇アールほどの谷間の斜面、その多様な樹種の栽植に驚く。

海岸線のポンカン・内陸部の温州・山場の香酢類が仲良く揃う樹姿園景。作主の栽培眼は、樹種の馴染み特性

分別に注がれ、ことに有望種の高接更新などにもその成果を高めている。温州は極早生・早生・中生、晩柑類は八朔・伊予甘夏・ポンカン・ネーブル・文旦、香酢は柚子・ブシユ

好評発売中!

高知のエスプリ

—ふるさとの未来を考える—

A 5判・160頁・定価1,200円(税込)

「文化高知」の創刊号から50号までの巻頭頁をまとめた書。こうして一書にまとめると、それぞれの文章が機関誌掲載時とはちがった感動をよぶとともに、底流にあって響きあうものが、重い説得力となっていることを教えられる。



カン・スダチ・カボス・レモンなど。段地毎の樹種栽培に、その特性管理が施され、地域特有の風味を育み故郷の味覚を産む。出荷は九月の極早生に始まり、越年貯蔵蜜柑を四月まで日々連続する。

少量多品目の象徴的かつ典型的な個別経営の生産流通一貫体系の前進にただ驚嘆する。これは独り柑橘に限らず各品目に及ぶものである。

ところで、農協共販額のトップが良心市で米・苺・生乳・生姜と続く。有線放送から毎日正午、店別品目の売れ行きを「はちきん情報」に流し、明日に備える。技法を磨く営農指導、桜の季節に消費者を迎え「街と田舎を結ぶ交流集会」など、支援を惜しまない農協活動がある。

郡部から、高知市街地への農協等産直出店は、すでに仁淀上・中流域と新庄川・吉野川上流域など、広域多数に上り、自然と田舎に親しむ市民の歓迎があつて定着し繁盛する。

日の目なき少量多品目は、売り場なき徒花として地域に埋もれてきた。婦人群像「売り場によってこそ農は生きる」ハチキン一徹の壮挙は、地域流通の閉鎖性を見事に克服し、田舎と街を結ぶ人間性豊かな生産流通機構の創造となり、流域農耕文化の明日を拓く。

(元高知県農業協同組合中央会参事)

百聞は一見にしかず

可知 文恵

大阪空港を出発して六時間、飛行機は高度を下げ、やがてバンコク(タイの首都)の灯が見えてきた。ドン・ムアン空港に降りて驚いた。広々としてよく整備された施設、数車線もある道路には車がいっぱい、ビルディングの街並みと、バンコクは近代的な大都会だ。空港から約四十分、私たちの一行三十人はバスでロイヤルホテルへ。

翌日、私たちはバンコクの観光に出掛けた。このホテルの近くには王宮広場があり、そこを通り抜けて、ワット・プラケオ(王宮寺院)へ。寺院の庭へ入ると金色に輝く眩いばかりのパゴダの尖塔に圧倒された。極彩色の細かい焼物でモザイクされた大寺院群。ワット・ポー(涅槃寺)では全長四十九メートル、高さ十二メートルの釈迦の涅槃像が横たわっている。全身金箔で覆われ、足の裏には真珠母貝を使って螺鈿細工が施されている。

私たちはこの豪華さに感嘆の声を上げ、見とれるばかりで拝むことを忘れていたが、タイ人は仏像の前に跪いて敬虔な祈りを捧げていた。線香に花を供えて金箔を仏像に小さく切って張っている。何と贅沢なと驚いたが、これは本物ではないということであった。

私はマルコ・ポーロの『東方見聞録』の中にある「黄金の国」というのは日本ではなく、タイの国のことではないかと思った。日本の金閣寺、金色堂の比ではない。そこで、案内役のタイ人の大学生に、タイで金が採れるか聞いたが「ノー」との返事であった。

その日の夕方、バンコク駅を出発し、寝台列車でチェンマイへ。約十三時間。翌朝チェンマイ駅にはワークキャンプ先の学校の先生や村の婦人たちが「ようこそチェンマイへ」と書いた横断幕を持って出迎えてくれた。私たちは車に分乗し、トゥン

ルアントン村へ。小学校に着くと、大勢の小学生や村人の出迎えた。色は少し黒いが顔だけは日本人に似ている。服装もTシャツにズボンと小ざっぱりしていて、異国に来たという感じはあまりない。

私たちは小学校の隣のお寺へ案内され、そこで歓迎の儀式を受ける。これはバイシンと呼ばれ、僧侶が読経の後、聖なる糸(綿糸)を日本人の手首に結ぶ。僧侶は女性の体に触れてはならないとすることで、女性は村の長老に結んでもらった。これは親族の契り、安全加護などの祈願の意味を持っているという。



歓迎の儀式・バイシン

ファミリーの紹介を受けて、チャンパジー家へ。英語は全く通じない。頼りはクントン先生手作りの日・タイ語テキスト。お互いにテキストを仲介として、指で示しながらまず自己紹介をする。

私の家はウィーラデ(父34才)、カンケウ(母33才)、アンチャリー(娘12才)の三大家族だった。外に数人いたが、親族とか近所の人で、日本人の私があるの珍しくて集まって来ているようだった。父親の職業は農業と大工ということだった。住居は高床式ではなく、平屋で玄関を入るとそこには木製の応援セット、テレビ、冷蔵庫が置いてあり、床はタイル模様のビニールシートが敷いてあった。ちょうど日本の昭和三十(四十年頃)の生活を思わせる。

私の部屋は玄関を入って右側の一段高い四畳半くらいの広さで、寢床の上にはカヤが吊られ、扇風機も置かれていた。私はそれから毎夜、屋根裏から聞こえるヤモリのキーキーという鳴き声の子守歌に眠り、朝は、あちらこちらから聞こえるニワトリの大合唱が目覚める。庭ではお母さんがかまどに薪を焼べて、御飯を蒸している。私はふと子どもの頃を思い出した。それは、かつての日本人が持っていた生活ではないか。

(タイ・ワークキャンプ協力員)

山の時間 海の時間

高橋 宣之

私は自分の職業を「波撮り職人」だと思っている。あえて肩書きを付ければ「海洋写真家」ということになる。撮影エリアは主に海岸線で、この二十年飽きることもなく水平線と波頭ばかりを見つめてきた。あまりにも茫洋とした風景にいたせいか、性格までポーとなってしまうが、今時めずらしい職業にありつけたものだと感じている。そんな私が海に流れ込む水を見ようと、山野に興味を持ち始めたのは五年前のことである。

四国は海に囲まれた山国。ふりむくと幾多の川がしわだらけの四国山脈の中を蛇行していた。私は海側から尾根に向かって一つひとつの川をさかのぼり始めた。川の領域に入っ

て気付いたことは山野には山野の時があることだった。平和で緊張感の少ない「海の時間」にひたっていた私は、メリハリのある「山野の時間」に最初はとまどいすらおぼえた。月明かりをたよりに夜明けの谷を下った時のことだった。不気味なほど静まりかえった森からときどきフクロウの鳴き声が聞こえていた。やがて夜が明けはじめ、薄明かりのなかに木々のシルエットが見え始めたその時、谷間にけたたましいヤマセミの一声が響きわたった。続いてヒヨドリやコガラやカワガラスなどの

野鳥がさえずり始め、夜の世界は一瞬にして昼の世界に変わっていた。樹間にさす光はかすかで、朝と呼ぶにはまだ薄暗い時刻だったが、谷は確実に昼の世界になっていた。そしてこの時からフクロウの鳴き声を聞くことはなかった。動物が個々の縄張りを持つように、それぞれの動物は明確な時のテリトリーを持っているのだろうか。いや、動物だけでは、このころから植物も光合成を始め、山は一斉に昼の世界に変わるはずである。

水平線の一部がぼんやり明るくなり、星が一つずつ消えて、ゆっくりと暖色の夜明けをむかえる。「海の時間」とちがって、山野では時の輪郭が実にはっきりしていた。

赤く萌える芽吹きの新緑の森が三日もしないうちに輝く新緑の森に変わったり、錦を織りなす紅葉の山腹が一夜にして真っ白い霧氷の世界に変わった。山野の時は手品師のようでもある。

○ 昨年の冬、私は一羽のルリビタキに出合った。ルリビタキは日本で繁殖する数少ない青い鳥。夏は亜高山針葉樹林で子育てをして、秋の深まりとともに山を下る鳥と聞く。つぶらな目を持ち、パステルブルーの羽色なんとも美しい鳥である。その

ルリビタキは何度か森に通ううちに私を許したのか、「ヒョロロヒョロロ」と丸みを帯びた美声で迎えてくれるようになった。静寂に満ちた山奥でルリビタキとの出合いは心ときめく時でもあった。人は自然の中に入ると謙虚になれると思う。謙虚になるといろいろなものが見えてくる。私は数年前まで鳥や花に関心を持つことはなかった。それでも川をさかのぼり森を散策するようになってから、自然はさまざま姿を私に見せてくれるようになっていた。私は「山野の時間」の中で多くのことを学ばせてもらったような気がする。

二カ月の間ほとんど毎日のようにあっていたルリビタキだったが、四月のある日とうとう別れの日がやってきた。風の強い午後だった。ルリビタキは抑揚のない悲しそうな声でさえずった後、ひそやかに北に向かって飛び立った。いさぎよく、爽やかな別れだった。旅立ちの後には風に漂うアケビの花の芳香が残っていた。

○ 弓矢のごとく飛び去っていく都市の時間。ゆるやかに流れる海の時間。あざやかにいさぎよい山野の時間。それぞれのフィールドにはそれぞれ別の時があることを私は知った。

(写真家)

マンガを夢見た



亀井 利恵

わが家では夫も私もマンガ大好き人間。本棚は二人の買ってくるマンガの単行本であふれています。いい年をしてと思われませんが、喫茶店に行くといふ年をした大の男が少年マンガを読んでいきます。私はジャンルを問わず大体のマンガは読みますが、買ってくるのは別。自分の気に入ったマンガ家の本しか買ってきません。学校の先生や親から敵視されるマンガですが、今の小学生や中学生の親たちは私と同年代の方が多いと思います。ですからマンガを読んだことがないという人は少ないのではないのでしょうか。

私とマンガの出会い、小学四年頃友だちから見せられた一冊、萩尾望都の『ポーの一族』でした。それまでマンガといえば美容院か食堂でしか読んだことがなかった私には、カルチャーショックでした。その当時の少女マンガといえば主人公はお目々キラキラの美少女と美

少年の恋愛ものが相場で、その頃文学少女だった私は多少バカにしてみました。しかし、このマンガはなんと美少年二人が主人公で、しかも男子校の中の話。それよりも私がショックを受けたのは話の深さでした。このマンガ家には心理的なものが多く、今までのタイプとは異なるマンガが多かったのです。これがきっかけでマンガにのめりこんでいったのです。この『ポーの一族』は吸血鬼の少年二人が中世から現代へと生きていく姿を描いた話ですが、マンガの古典ともいえるようなお話です。

忘れられないのは、やはり宝塚でおなじみの『ベルサイユのばら』です。私たちの年代でこれを知らない人は少ないでしょう。それほど人気のあるマンガでした。オスカルとアンドレは架空の人物ですが、歴史的人物や史実に基づいて書かれた部分もかなりあり、このマンガのおかげ

でフランス革命に詳しくなった人もいたのではないのでしょうか。私もこのマンガのおかげでフランス革命やマリイ・アントワネットの本を読んだものです。池田理代子のマンガには、ロシアの女帝の話やナポレオンのものもあります。また、少女マンガには歴史物が結構あります。大和和紀の『あさき夢みし』(源氏物語)や里中満智子の『長屋王残照記』、山岸涼子の『日出ずる処の天子』等、これは聖徳太子の話ですがなかなか面白い。史実に基づいて細かく書かれている部分もあり、聖徳太子の話と一緒に読むと、お札に出ていた聖徳太子とは全然違う雰囲気を楽しめます。

これらの外に当時大反響をよんだ竹宮恵子の同性愛を扱った『風と木の詩』や、今でも続いている(始まったのは私が中学生のときでした)『ガラスの仮面』、シベリアンハスキーの人気を生んだ『動物のお医者

さん』など、考えさせられるもの、現実的でない面白い物など実に様々です。少女マンガは「大金持ちで美少女、性格も良いが家庭や過去に暗い影を背負っている」というのがよくあります。こういう設定は少女たちの憧れ、夢なのです。到底できないことや、やりたいことをマンガの主人公に自分を重ね、実現させる。少年マンガも同じではないでしょうか。現実には不可能な冒険や、なれるはずもない超能力者。昔は『鉄腕アトム』や『009』、『ジャングル大帝レオ』、今なら『ドラゴンボール』。

今も昔も少女少女は夢と憧れを持っているのです。特に女の子は、マンガで夢と理想を、そして現実とのギャップを嘆き、強くたくましく大人の女性に成長していくのです。よく男はロマン的で女は現実的といいますが、女性だって夢をみたいのです。現代の男性たちを見ると、女性が現実的にならざるを得ないような気がしませんか？

夢もロマンも失いつつある現在、せめてマンガでもいいじゃないですか、夢をみたいですね。(ただ今、水木しげるの世界を読んでいます。これは夢にみたくないです。)(劇団ゆまにて)

四季に楽しむ

堀 洋子



久万スキーランドにて

自然を楽しむことが出来ないものが出来ないものかと思え始めた。春はイタドリ採り、夏は海へ山へキャンプに出掛け、秋には紅葉などそれぞれに自然を楽しむ、日曜祭日毎に出掛けるほどの自然大好き人間にとつて、ふと気が付くと、冬に自然の中で楽しむことがなかった。

よくある話であるが、時として情性で生きている日々の生活が、一つの趣味を通して生き生きとしてくる

ことがある。私事ではあるが、スキ

ー大好き人間のことである。四年ほど前のこと、一人娘も小学校の五年になり、そろそろ子育てに手が掛からなくなった頃、この辺りで子どもと共に残されたかかわり合いをより良く過ごすため、何か共に楽しめることがないものかと思うことがあった。

それと同時に、都会育ちの私が、アウトドアを満喫出来る高知へ来て六年を過ぎた頃で、四季を通して

スキー場へ通い練習を始めた。当時はペーパードライブであったので、バスで二時間半もかけ、月二回のペースで足繁く通った。そのうち道具を購入、運ぶためには車が必要になり、一大決心をして運転に恐々トライ、ベテランドライバーの顔で、日々運転をしている。その年の冬に、心待ちにしていた雪の中のスキーには感激した。初めてスキーツアーに参加、高知より十二時間もかけて長野のスキー場に出掛けていった朝、寝覚めのバスの窓から見る白銀の世界には、心待ちした世界とはこれかと感激した。高知県から冬のスキー場通いとなると、行く先は県外へ車の乗り合いで出掛けることが多く、半ば団体行動にて、早朝の出発になる。ふと気が付くと、寒い冬の朝寝坊大好き人間が、早起きして車を運転している。寒さ嫌いの冬嫌いな人間が、早朝のゲレンデにいる。以前とは別人のように思える。

昨年のことであるが、仕事の関係で、建築士会の女性部会で、「国際交流・カナダ研修旅行でスキー」の話が持ち上がった。その前年の行事で、カナダの女性建築家と高知で交流があった。今後継続行事としていくため、今回は高知よりカナダへ行くことになり、多数の参加出来る

よう、旅費の安い冬期を選んだ。さらにより自然を知り楽しむために、スキーを兼ねた研修旅行に発展した。これも今思えば、スキー大好き人間が、行った先々で、「スキーで人生が変わる」と声を大にして言ってきた結果である。

スキー大好き人間にとって海外へのスキーツアーは、実現させたいとひそかに思っていることで、わが家でも一人娘の高校卒業祝いとして計画をしていたが、ひと足先に行くことになる。飛行機嫌いな人間の私が、仕事で乗る時は、前日から気分がダウンするが、スキーでカナダに行くための長時間飛行は、さほど思わない。現金な話である。

昨年の秋より、女性部会のカナダ研修参加者が、人工スキー場の練習雪のゲレンデにて日々特訓中だが、はやスキーの楽しさに取り付かれる人も数人、心は「カナダでスキー」の思いでいっぱいだ。この調子では、来年の研修旅行前に、「北海道でスキー」ということもありそうで、それと同時に、いつのまにか気付かないうちに、早起き、寒さ知らず人間になっっているのでは……。

「新しい楽しい世界によるこそ……」と、一人ひそかに思っている今日この頃です。(インテリア・デザイナー)

土佐犬はいま

社団法人日本犬保存会高知支部長

門田 忠夫

「土佐犬といえば『闘犬の土佐犬』
と知っている人も多いでしょうが、
『天然記念物土佐犬』とはどういう
犬か、その由来、特性、また保存が
どのように行われてきたかなどにつ
いてお話し下さい。」

「高知県の方々でも土佐犬につ
いて詳しい方は少ないと思いますので
簡単に説明をしますと、日本では新
石器時代の初めに我々の先祖が野犬
を飼い馴らす努力をしています。そ
れは一万二千年位前と推定されてい
ます。これが土佐犬の起源とされ、
平地の少ない高知県の猪を捕るため
の狩猟犬として、また番犬や時には
気持のうえの話し相手として、人
間と共に生きてきた訳ですが、明治
時代になると急激に外国人と共に異
種犬が日本に入って、交通の便の良
い本州では雑種化し始めます。それ

で大正後期に高知駅前にありました
岡崎病院の医師岡崎先生や古城耳鼻
科の古城先生らによって、せっか
交通不便が幸いし純血が保たれた日
本古来犬『土佐の犬』を保存しよう
という気運が高まり、土佐独自の特
徴を有した犬のために『土佐犬』と
命名し保存運動が始まった訳ですが、
中央でも昭和初期になると同様の運
動が始まり社団法人日本犬保存会が
発足しました。そして高知で土佐犬
愛好会と称し活動をしていた会も発
展的統合をし、全国的に保存するこ
ととなり、現在でも土佐犬（日本犬
保存会では四国犬）として知られて
います。
特徴は立ち耳、巻き尾、被毛色は
黒、胡麻、赤、白等があり、特に世
界のどの犬種にも優る軽快な動きと
従順な気性を備えた犬種です」



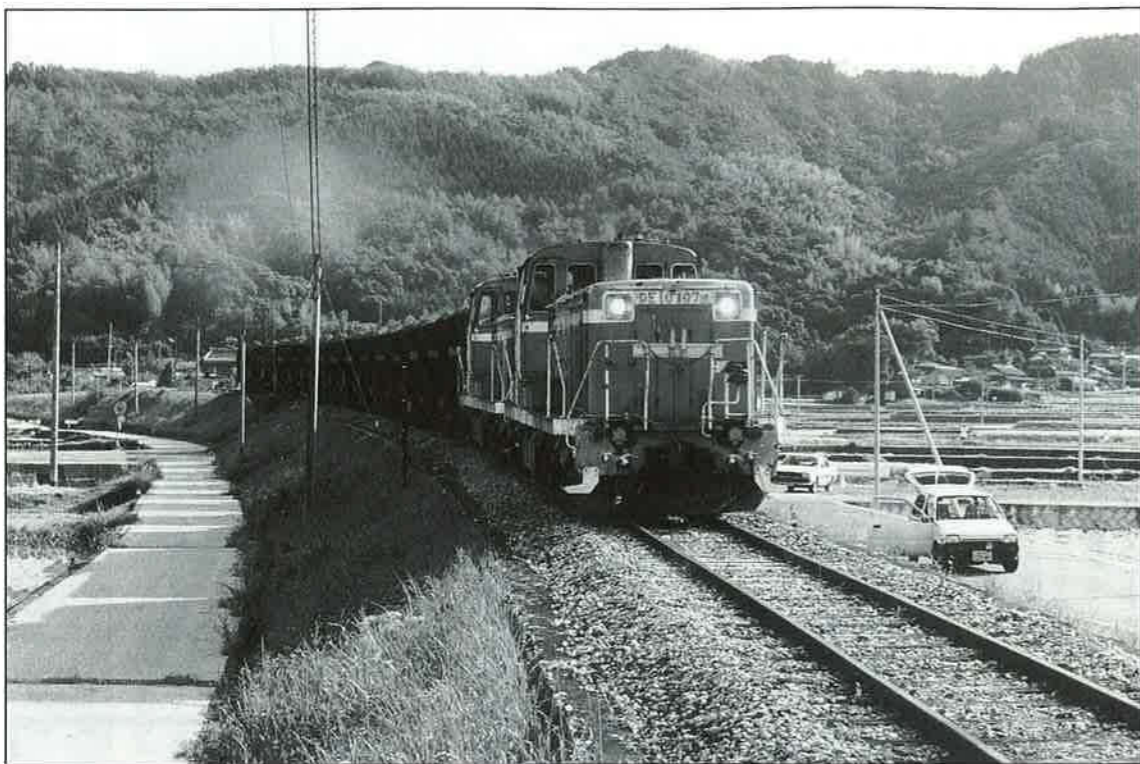
雅 姫 号

「県においても最近『天然記念物
土佐犬保存規程』が改正され、その
保存に力を入れていますが、なぜ土
佐に純血度の高い日本犬が残ってい
るのでしょうか。
「最初にも述べましたが、交通不
便であったことにより雑種化が鈍か
ったこと、早い時期に熱心な方々
による保存運動が始まったことが純
度の高い日本犬（土佐犬）を残せた要
因です」
「実際に飼育されてのご苦労とか
楽しさ、特に展覧会などの様子もお
聞かせ下さい。」

により、運動コースはほとんど舗装
となり、排尿や排便させる場所の制
限や、家屋の密集により泣き声によ
る騒音等があります。留守番にな
りますし、緊張連続の生活環境の多
い昨今、純粋で素直な動物（土佐犬）
と接すると心のゆとりを感じるこ
とも思います。なお、県下においても
春秋展覧会を開催し、県内外よりそ
の都度二百頭程の愛犬を出陳し一日
を楽しむ競い、併せて種の保存の目
安としていきますので、市民の皆様
も一度足を運んで頂きたいと思っ
ています」

「土佐犬の保存は大丈夫でしょ
うか。問題点や今後についてお尋
ねします。」

「平成五年十二月に高知県教
育委員会において、『天然記念
物土佐犬保存規程』が見直され、
優秀な土佐犬には、その単独犬
に認定制度を作り、より優秀な
種の保存をすることとしていま
すが、頭数的に県内の飼育犬頭
数は数十頭と激減しています。特
に優秀なものにおいては数頭
を数える状況となっています。
先祖が大切に飼育し現在まで守
り、日本人の気性にマッチして
生涯一君の気性を持った『土佐
犬』を、いま保存しなくてはと
危機感を抱いています」



第9回高知の映像コンテスト入賞作品

高知を撮る

さようなら石灰石列車 藤田 光男

俳優の顔はどの顔が本当の顔だろう
か。普段の顔と演技の顔。名優は顔だ
けでなく人格までも、その人になりき
って演じてしまう。芸の奥義を究めた
人には脱帽せざるをえない。だが、テ
レビなどでよく見る俳優の顔も、直接
会って素顔で見ると、いたって平凡で
あったりする。画面
で見るときの魅力な
ど、どこを探しても
ない。商売上の顔と
いうものがあるのだ
なと、おどろいてし
まう。
いま一つ、功成り
名遂げ、あり余るほ
どの富を築いた人に
貧相をみることにあ
る。富を得、巨億の
財を築いても、なお
満ちたりるものを持
たないのだろうか。
それとも、さらなる
富への執着が、その表情に陰りを与
えるのだろうか。権勢に執着をもつ人も
同じことが言えそうだ。少し前に総理
大臣になった人は、それまではいい顔
をしていたが、総理になると俄然目つ
きがきつくなり、政権欲がきらきらし
てきて下品な顔になった。人間のおよ

富者の貧相

風俗歳時記



まじさをみせつけられるようではな
かった。人間四十歳になったら、自分
の顔に責任を持つていったのは、アメ
リカ第十六代大統領リンカーンだとさ
れる。確かな証拠はないが、いいえて
妙である。親から貰ったそれぞれの顔
を、いつへ自分の顔にするかは、そ
の人の生き方にかか
わる問題である。
さて、会うたびに
いい顔になってい
る人がいる。見るから
に努力し精進してい
るとみえる人もい
るが、特別努力らしい
ことをしている風
のない人にも、会った
びにいい顔になっ
ている人がいる。そ
うした顔の人と会っ
たのは、楽しみである。こ
れと反対に、会った
びにさびしい顔にな
って行く人もいる。中には何年かする
うちにすっかり悪相になった人もい
る。百人いれば百人の顔があるといわ
れるように、顔は皆違っただが、大切な
は、みかけの目鼻立ではなく、その心
との内面の充実が、味となってあらわ
れてくるものだと思う。 (晋)

青春を舞台に

田中 光雄

劇団「極楽トンボ」は、平成五年二月に私が新聞の「仲間はどうぞ」の欄で団員を募り、集まったメンバー十名で結成しました。「役者は極楽トンボでいいんだよ。休まず・たゆまず・おおらかに、芝居に精進しなさい」という東京時代の恩師の言葉より劇団名としました。私を除きメンバーのほとんどが素人だったので、第一回公演は、役者としての技量・力量をつけるために昨春、実習公演として寸劇・朗読を披露しました。第二回公演は、ニールサイモン原作「思い出のプライン・ビーチ」を脚色し、昨秋、喫茶店のイベントホールで上演しました。現在は青年センターで、毎週、月・水・金の七時から九時三十分まで、発声練習から始まって、寸劇・朗読・劇・朗読・活舌・パントマイム・エチュード・ダンス等を、時間の許すかぎり稽古をしています。今年、八月



旭茶の友会

楽しいお茶の集い

藤堂 住恵

昭和五十六年四月、当時の木村会館で表千家地方教授吉田菊恵先生を迎え、先生のご指導により表千家茶道研修の会をつくり、その名称を「旭茶の友会」と名づけこの会は発足しました。当初会員は十数名で、会の目的は表千家茶道の研修と相互の親睦を深めるためでした。入会者は木村会館の茶道講座を修了した者に限られていました。その後会員が増加し指導補助員を迎える程になっていきました。



時は流れて茶道講座は応募者が少なくなつて廃止され、加えて会員の高齢化に伴い「旭茶の友会」の会員も減少してきました。平成四年頃から、会員相互の助け合いにより自主研究で茶道を楽しむという態勢になり、現在は茶道愛好者の自主運営で相互に学び合いながら茶道研修を重ねています。

合唱団「タカネーズ」

病院でコンサートを

大脇 嶺

高知市民病院のミニコンサートは、五回を重ねるに至り、病院の重要な行事の一つに数えられるようになりました。「タカネーズ」は、このミニコンサートを支える院内合唱団で、世間での知名度は今一つですが、病院内では一定の評価を得ています。「タカネーズ」の名称は、「大脇嶺(タカネ)率いる美人看護婦グループ」に由来しますが、メンバーは医師、看護婦、薬剤師、技師、事務職など院内のあらゆる職種の人が集まり、総勢三十五名。練習期間は八月から一月の間で、昨年は一泊二日で合宿しました。

タカネーズの大きな悩みは、楽譜の読める人が少ないこと、ピアノの伴奏者がいないことで、大きな声の人に合わせ歌うことになり、変則勤務のために、全員が集まるのが困難で、ミニコンサートのステージのみが、全員集合の唯一の機会です。「高知マンドリンクラブ土曜日会」と「高知コーラス合奏団」の応援を得てはいますが、混声四部合唱をこなすのは奇跡的ともいえます。「川の流れるように」をテーマ曲とし、小学校程度の混声二部ないし四部合唱を歌っています。ミニコンサートの開催は、市民病院玄関ロビー、入場希望の方は、当日入院して頂く必要があります。(開催日は未定です)



「米田婦人部舞踊会」

明るく楽しく健康で

谷 由賀雄

明るく健康で、地域の方々と融和を目標として昭和五十八年米田婦人部舞踊会を発足しました。以来週一回の割合で稽古に励んでおります。現在会員は十名です。年中行事として中央公民館主催の郷土演芸大会に米田公民館から毎年出演をしています。また朝倉神社夏祭りに舞踊奉納し、地区内の朝倉病院等への慰問なども十年になりました。



平成元年からは曙町寿会と合同で、毎年十一月中旬に朝倉文化センターにおいてチャリティー舞踊会を開催しています。舞踊愛好家の皆様方のご支援を頂いて五十名余がご出演下さいました。また、売店を開いて、すし・おでんなどを売った収益金を全額高知市の福祉基金に寄附

散歩の途中で



「教えてくれますか」「やりますか」見物人同士の「こんなやりとりから、また新しい「対局」が始まる。ここは藤並公園。まだ堀をわたる風は冷たいというのに、この日だまりの野外将棋はにわか熱をおびてくる。

に旗揚げ公演として私自身の汗と情熱として思い深い作品、劇団青年座演劇研究所所長西島大台本「ステージ・ドア」を上演する予定です。とにかく、人が多く集まることによってチケットの販売、感性的交流、活気等に大いに役立ちます。「やる気」が湧いたら常時団員を募っていますので、お申し出下さい。初心者の方でも丁寧に指導いたします。演劇人としての第一歩を踏んでみませんか。

連絡先 高知市棧橋通二丁目一五〇

高知市青年センター内

電話 〇八八八―三二―四九三二

を重ねています。

・研修日 毎月第二・四金曜日 午後一時半より二時

・研究内容 表千家茶道

現在、会員は八名ですが、和気あいあいと助け合い、楽しいお茶の集いです。本年度四月に水道山で野点をしました。満開の桜花の下で、おちついた茶の湯の雰囲気味わうのも格別です。去る一月十四日は初釜を実施しました。写真はその場面です。

連絡先 高知市長尾山町一三一九

電話 〇八八八―四四―〇八四五

風伯

極東の情勢は不可解なり

福祉住宅であった。デンマークのこのような福祉水準は、二四％の消費税をはじめ、収入の五二％を超える租税負担によって支えられているという。

高福祉はともかくも高負担に対する国民の異議があるのではと、日本人の誰もが抱く疑問符を女性の日本人通訳に投げかけて

しています。さらに毎月一日を地域の清掃日としています。これは老人クラブの行事ですが、会員が老朽会員ですので空カン・空ビン・塵拾いを実行しているのです。道端の花造りも楽しい行事の一つです。会員は少数ですが、「これからも明るく楽しく健康で」を合言葉でやっています。少しでも社会のためになることが出来ればと、感謝と奉仕の心を持って会員一同頑張っています。

皆さん、一度遊びにきませんか。

連絡先 高知市朝倉内一八六一〇

電話 〇八八八―四三―五〇四四

みた。すると「抗議行動があったことはな。ただし」と彼女は続けた。「ただし、お金の使途については厳しいものがあります。去年、文部大臣が地方の教育事情の視察に行ったとき、その都市の最高級ホテルに宿泊し、黒塗りの公用車で観光地に立ち寄ったことが問題となり、とつとつ更迭されました

「それにしても」と、さらに彼女は続けた。「ゼネコンから金を買ったのうのとされている日本の政治家はどうなっているのでしょうか。デンマーク人からそのことを聞かれて困ります」

その昔、「欧州の情勢は不可解なり」の言葉を残し、政権を投げ出した宰相がいたが、今や欧州では「極東の情勢は不可解なり」と思っているのである。

(寸角)

第10回高知の映像コンテスト

写真展・高知を撮る

第10回高知の映像コンテストに応募された写真の中から、入賞した作品約80点を展示いたします。すでになくなってしまった風景や、将来へ残しておきたい風景など、高知の風景をご観賞ください。

3月17日(木)～3月22日(火)

*午前10時～午後6時

於：市民フロア (はりまや橋・デンテツターミナルビル5階)

主催：(財)高知市文化振興事業団

お申し込み

(財)高知市文化振興事業団
☎ 73-43365



所在地

高知市はりまや町一
五丁・デンテツター
ミナルビル5階

広さ・内装

96㎡壁面布クロス張り、
スポットライト完備

市民フロアのご利用を
展示や会議に最適!

賛助会員募集中!!

会費
特典

年額 2,000円

- ① 機関紙「文化高知」を年6回お手元にお届けします。
- ② 事業団発行の出版物の10%割引 (一部例外あり)
- ③ 主催事業や刊行物の案内(マスコミ利用の場合あり)

[※上記特典は申し込みいただいた日から1カ年有効]

お申し込み

- ①郵便振替
- ②現金書留
- ③直接事業団へ…

いずれの方法でもけっこうです。

財団法人 高知市文化振興事業団

〒780 高知市本町5丁目2番3号

TEL(0888)73-4365
郵便振替 徳島 8-14869